



Title	応答の教育としての阿部ヤエ伝承論〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	岡, 幸江
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7099号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78150
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sachie_Oka_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：岡 幸江

学位論文題名

応答の教育としての阿部ヤエ伝承論

本論文は、岩手県遠野に生きた伝承者・阿部ヤエの存在によって明らかにされた「人の一生を育てる伝承」に着目し、応答の教育という視点から、うたや昔話といった伝承の現象の背後にある、伝承を介した自己形成、および伝承の意味世界の生成プロセスに迫ろうとしたものである。

本論は、社会教育学研究において蓄積されてきた、共同学習論をはじめとする「共同性」に根ざした教育的アプローチを継承しつつも、これまで十分には明らかにされてこなかった、個人の生活文化をふまえた支援―被支援の関係を通じた共同的基盤の生成論理に迫るために、「応答性」という観点を設定した。

この「応答性」アプローチを深めるために、本論は、社会教育学と民俗学的知見の架橋を試みた。そこには社会的力学と関わりつつも一線を画す、固有の生活世界の像と応答の論理が見出せるのではないかと考えたためである。

民俗学および口承伝承研究において、伝承は重要なテーマをなす。柳田國男を端緒とする口承文芸に関する研究は、昔話など「耳の文芸」の収集・分類に始まり、そこで明らかにされた子育ての習俗は、人々の生活世界に関心をよせる教育学研究から、「村の通俗ペダゴジー」（中内敏夫）などとして注目された。ただしそれは、〈教育〉も教育者も存在しない共同体社会像においてとらえられ、子育ての習俗において人づくりを担うのは無名の民衆であった。従って、人が教え育つ生きた具体的なやりとりがそこに見いだされることはなかった。

こうした中で本論が注目したのは、口承文芸研究における語り手と聞き手の応答性への知見である。口承文芸研究の研究関心は1980年代以降、現代的に組織化された伝承に向かう一方、生きた事象としての「日常の語り」への探究は進まなかったように思われる。こうしたなかで本論は野村純一の議論に、語り手と聞き手の間の、うたや昔話などはもとより背後にある「目に見えないテキスト」を媒介したやりとりの中に、聴き手の能動性・主体性を見いだす視座を抽出した。

それは共同体における文化を介した主体の表れとも理解された。

本論は「人の一生を育てる伝承」を、単なる過去の遺産ではなく、伝承者の存在による伝承の意味世界と伝承空間の生成に基づき現代にも息づく、暮らしのなかの伝承と位置付ける。ただし地域社会ではうたや昔話等の現象のみが知られてきたため、無文字の先人が託した思いを文字で書き記そうとした伝承者としての阿部の仕事を介し、地域の人々も初めてその意味を知ることとなった。

本論はこの「人の一生を育てる伝承」について、伝承をめぐる「応答性」に目をむけ、阿部やその継承者と筆者の関係構築に基づくアクティブ・インタビューを方法として、人々の暮らしのなかでの伝承を介した自己形成、および伝承の意味世界の生成プロセスに迫ろうとしたものである。

本論は、上記の目的を達成すべく、二つの課題を設定した。第一の課題は、「人の一生を育てる伝承」の理解枠を提示することであり、本論前半にあたる。そのため以下の作業を試みた。作業の第1はインタビュー記録や著作をもとに、この伝承の体系性と段階性をもつ様式と意味、その目的を描き出すことである。ここでは、わらべうたも昔話も「ひと組みとして」意味世界を構築し、それが一人一人の生涯にわたる探究の向かう先となっていることが示された。

作業の第2は、大人と子どもの間で伝承の意味世界を介して具現化される「応答の教育」を具体的に描きだすことである。資料は阿部が一人の子どもの0歳から15歳までの育ちに関わりかけた唯一の記録、全47本のビデオテープである。本論はこの資料から2つのテーマを抽出し継続的な教育学習プロセスとして再構成した。シーン集1「『自然』と向き合う応答の教育」では、子どもが五感を働かせて行動する機会を用意して待つ、自然ある環境とわらべうたの役割および大人の関与のありようが示された。シーン集2「生涯にわたる段階的な応答の知の獲得」は、段階的に成熟する営みをとらえるため、0歳から約12歳にわたる7つのシーンで構成した。ここでは大人と子どものわらべうた等を介した真剣なやりとり、子どもが関心をたちあげ段階的に言葉や行動を現わす様子、そして発達段階への見通しをもって、観察・判断し、子どもが内側から何かをたちあげてくるのを待ち、間を保障する大人の姿が見出された。本論はここに、応答性のもとに子どもの主体が引き出される伝承の意味空間が、現代的環境においても生成される様子を明らかにした。

第二の課題は、伝承者のライフストーリーを通して、伝承者の生涯にわたる学びと意味世界の形成プロセスを描き出すことである。これが第3章以降後半部に該当する。本論は、英国インフォーマル教育論も参照基準とし、伝承者の人生における学びの基本形を、「伝承（伝えること）」と「自己学習（学ぶこと）」の

循環、と設定した。「伝承」の基となる一対一の関係は、同時代はもとより、記憶を介し過去にも及ぶ。「自己学習」は経験を基に行われるが、その際わらべうたや昔話は、単なる遊びの道具ではなく、「声」において応答関係の基盤をなすとともに、日常の様々な経験をつなぎ意味づける媒体ととらえられた。

その上で第4章では、伝承者・阿部ヤエの、生活者としての学びと成熟の過程が明らかにされた。阿部は自著にて12歳の伝承者への決意や断片的な伝承場面は記したが、生活者・学習者としての人生の全体像は示していない。本論は阿部との応答的なやりとりを通して、彼女の人生に5つのターニングポイント（敗戦、進学断念、療養、自ら率いた地域グループ実践、文字に書き表すこと）を捉え、伝承を支えにいかに転機に主体的に向き合い学びと人生の成熟を重ねたのかを、この伝承が子育ての目標に掲げる「己に克つ」姿、「抵抗の精神」を育て実践するものとして明らかにした。特に後半生の地域実践と文字に書き表すことにとりくむ姿からは、伝承で育った生活者としての自己実現と、伝承者として葛藤し模索する姿が、統一的に把握された。

第5章では、阿部が先人や研究者や協働者などとの応答的な関係のもとに、伝承を「研究」し主体的に意識化していく具体的な5つの場面を通して、伝承者による意味世界の形成プロセスが示された。特に本章では意味世界を理解・習熟し手渡す、伝承者としての成熟に焦点が当てられている。伝承者は伝承を守り継承するために、時代の変化に向き合い、学び、伝承のかわらぬ価値を確認しつつ、現代にみあう表現で伝承の意味世界を現わそうとしていた。この伝承が今なお「生きた伝承」であると位置づけうるのは、こうした伝承を「研究」し再創造し続ける伝承者の姿あつてのものでもあることが明らかにされた。

こうして本論は、学び続ける生活者—伝承者の姿を通して、伝承関係を媒介して人の成熟を支えるとともに、時代に応じた意味世界をも生成する「応答の教育」のありようを明らかにした。人の成熟を支える媒体・環境としての伝承のありようは、文化の教育的意味の再考にもつながるものだろう。最後に、本論は社会教育学研究におけるインフォーマル教育論的視座の発展可能性につながるものでもあるとして考察した。